

令和 3 年 5 月 30 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K01062

研究課題名(和文) 玉類の流通からみた威信財システム脱却過程に関する考古科学的研究

研究課題名(英文) Process out of the prestige system on beads distribution

研究代表者

大賀 克彦(Oga, Katsuhiko)

奈良女子大学・大和・紀伊半島学研究所・特任講師

研究者番号：70737527

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：墳墓に副葬された玉類を中心として、古墳時代後期から古代までの変遷過程や地域性の実態を調査した。その結果、古墳時代後期～終末期には非常に多様な玉類の流通が活性化することが判明した。当該期における玉類の流通は地域性が顕著で、盛行時期に跛行性が認められるとともに、群集墳の築造状況とも相関する。特に、王権が所在する畿内周辺において、玉類副葬の衰退が先行する。一方、古代墓における玉類の副葬は低調で、政治的中心であった畿内周辺に散見される程度である。また、副葬される玉類の材質や製作技法が異なり、古墳時代からの連続性が全く認められないことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一般的には、古墳時代における各種の生産システムの発達や、政治的システムの成熟が国家の成立へと帰結したものと考えられている。しかし、玉類における生産や流通の実態からは、古墳時代から古代への連続的な移行は考え難いことが明らかになった。むしろ、国家システムは、古墳時代における威信財システムから先行して脱却した王権中枢が、原料の調達や製作技術に関して、独立的に構築したものであるという性格が明確であった。このことは国家の形成過程という古典的な問題に対して、新たな視点を与えるものだと考えている。

研究成果の概要(英文)： Transition process and variations among research areas of beads buried in tombs from late Kofun Period to early Heian Period were investigated. The distribution of very various beads were confirmed in late Kofun Period. In late Kofun Period, the difference of the kinds of beads and the peak time were not same among research areas. And, the peak time of beads distribution correlate to the construction of clustered tombs. In the central area of Japan, the beads burial were declined earlier. However, beads burial in tombs from Nara Period to early Heian period were very rare. A few beads burial were occurred around the central area of Japan. These beads were different to beads in Kofun Period on the material and manufacture technique.

研究分野：考古学

キーワード：玉類 流通 威信財システム 国家システム

1. 研究開始当初の背景

国家成立の前段階にあたる弥生～古墳時代においては、貴重な財の授受による非対称な首長間のネットワーク、および首長によって代表される地域間の中心・周縁関係が生成されるとともに、それらの財を最終的に厚葬墓へと埋葬することで、首長権の継承を正当化する「威信財システム」が発達する。そして、通説においては、「威信財システム」は全体として倭王権が主導する形で実行されており、その作動の蓄積が最終的に「国家」の成立へと帰結したものと考えられている。しかし、「威信財システム」を構成する各種の財の生産や授受のすべてに倭王権が関与したとは考えられない。また、古墳時代終末期後半には、王権膝下において奈良時代以降へ継続していく財の生産が開始されるが、これらの生産活動は、古墳時代から継続してきた生産活動と、時期的には併存する一方で、技術や流通関係において不連続である。このような移行期の実態を明らかにすることは、喫緊の重要課題であると考えられる。

2. 研究の目的

「威信財システム」から「国家システム」への移行過程を、考古資料に基づいて実態的に明らかにすることを目的とする。実際には、時期的にも地域的にも遍在的な玉類に注目し、個々の種類ごとに生産地を明らかにしつつ、その時期的変遷と、流通範囲や流通量の地域性について検討する。その際、倭王権が生産や流通を差配していたと考えられる種類と、倭王権からは独立して生産されていた種類の間には存在する様相の相違については、特に注目する。また、古墳時代後期から奈良時代にかけての玉類の製作技術やデザインの連続性の有無についても、重要な検討課題とする。最終的に、墳墓に副葬された玉類の流通量や流通範囲と、墳墓の築造状況の変遷を比較し、両者を因果関係で理解することが可能であることを示す。

3. 研究の方法

まず、古墳時代後期～古代の墳墓出土の玉類について、集成に新報告資料を追加した。その上で、各地の博物館および発掘調査機関に所蔵されている未見資料について、目視による観察を行い、分類学的な帰属を判定した。こうした作業によって、玉類の流通に関する時期的変遷や地域性を具体的に示すことが可能となった。その上で、目視による材質の判断が困難であったいくつかのガラス製玉類に関しては、借用の上、蛍光X線分析法による調査を行った。また、いくつかの鉛ガラス製玉類と鉛製耳環を対象として、鉛同位体比の測定を行い、原料産地の異同を手掛かりとして、どちらのシステムに由来する財であるか検討した。

最後に、調査結果を総括し、各地域における墳墓の築造状況の変遷と対比する。

4. 研究成果

後期古墳に副葬されたガラス玉類の分類および変遷

後期古墳の築造状況の変遷を明らかにするためには、解像度の高い時期区分の枠組みが必要であり、副葬された玉類の組成の変遷は有効な指標となる。特に、古墳の築造数が最も増大する時期に新出し、出現頻度も高い高鉛含有タイプの鉛ガラス (Group LIIB) や特殊な製作技法によって製作された植物灰タイプのソーダガラス (Group SIIIC) の出現時期の関係は極めて重要である。両者の出現時期は須恵器のTK209式期の中にあるが、僅かな時間差が存在し、Group SIIICの出現が先行することを確認した (大賀・田村 2019)。

また、植物灰タイプのソーダガラス (Group SIII) には、Group SIIIC や中期後半から流通が継続している Group SIIIB とは製作技法や着色技法が異なるものが散見される。福岡県隈山2号墳、同・宮ヶ浦古墳群、埼玉県南塚原10号墳等から出土した該当例について材質の調査を行い、既設定の材質グループには帰属しないことを確認した。さらに分析データを蓄積して、新たな材質グループとして設定する予定である。また、流通量は多くないが、西日本に偏った分布を示すなど、財の流通構造を考える上でも注目される資料である。

玉類の生産地に関する検討

玉類として、鉛ガラス製小玉および鉛製耳環の製作に利用された原料の原産地を検討するために、鉛同位体比の測定を行った。すなわち、茨城県磯崎東遺跡、群馬県唐堀1号墳、埼玉県南塚原古墳群、東京都殿山横穴墓群から出土した鉛ガラス製小玉と、兵庫県龍子長山1号墳、同・龍子向い山1号墳、同・庄境1号墳、香川県北原2号墳から出土した鉛製耳環を対象とした。結果はいずれも朝鮮半島中西部の百済系の鉛であることが判明した (大賀 2020・2021、大賀・田村・池田 2021)。これらの各例と時期的に相前後するか、僅かに後続して、日本列島においても鉛資源の採掘や鉛ガラスの製造が開始されたことが、奈良県飛鳥池遺跡の資料から判明しているが、古墳に副葬された玉類には列島産の鉛は利用されていない。このことは、後期古墳の築造

背景を考える上で重要な知見であると考えている。

後期古墳に副葬された玉類の地域性

特に、玉類が副葬された古墳が多い地域を中心に、既出資料の内容を確認する調査を行った。倭王権の中心である畿内周辺のほか、山陽、四国北部、北部九州、伊勢湾岸、中部高地、関東、東北を対象とした。その結果、大きく二つの点で地域性が明確となった。

第一は、流入する玉類構成に関する地域差である。例えば、翡翠製勾玉、百済系の鉛ガラス製小玉、おそらく東南アジアに起源する瑪瑙製丸玉は北部九州に圧倒的に集中するのに対して、東海系と呼称している蛇紋岩製の勾玉や丸玉は愛知県東部以東の太平洋岸を中心に流通する。鏝型で再生されたガラス小玉の流通量も、同様な地域において圧倒的に多い。また、流通量が少なく、流通範囲が狭い玉類も散見される。特に、群馬県中部付近における生産が想定される「葉口ウ石」製玉類の存在に関する認識が明確となった。

第二は、玉類の流通量における増減リズムの地域差である。北部九州のように、後期～終末期まで一貫して玉類の流入が認められる地域がある一方で、多くの地域においては流通量が変動する。しかも、埼玉県北部～群馬県南部と埼玉県南部～神奈川県や、香川県～愛媛県と徳島県のように、比較的隣接している地域間でも、まとまった量の流入が認められる時期が相違する場合が存在することが注目された。

古代の墳墓に副葬された玉類の実態

玉類が副葬された古代の墳墓は非常に少なく、古墳における玉類副葬の盛行と対比して、様々な不連続性が認められる。

まず、玉類が副葬された古代の墳墓の分布はほとんどが畿内周辺に限定され、他では中国地方に少数の事例が認められる程度である。すなわち、古墳時代の終末期においては、倭王権の中心から離れた地域の方が遅くまで玉類の副葬が盛行する点とも不連続である。

副葬された玉類は水晶製が多い。真球形を呈する形状や、使用された穿孔具に起因する孔壁の特徴、光沢の強い丁寧な仕上げ研磨といった製作技法から、古墳時代の玉類とは全く異なる。古墳時代の玉生産とは技術的な継承関係がない集団によって製作された玉類が副葬されたことが判る。

他に相違する点として、副葬される玉類の量が少なく、古墳のような多量副葬が発現しないこと、熱を受けて破碎している事例が散見されること、玉類であるにもかかわらず、孔を持たず、懸垂して使用することができない玉が散見されることなどが注目される。また、古墳に副葬された玉類に関しては、埋葬時期に近い時期に製作された玉類を中心としつつも、製作時期が遡る玉類が加わる組成を示すのに対して、古代の墳墓からは古墳時代に製作された玉類が出土することはない。すなわち、副葬されるまでのライフサイクルが全く異なると言える。

墳墓の築造状況と玉類の流通

古墳時代後期～終末期に関しては、定量的な提示は困難であるが、玉類の流入量が多い時期において墳墓の築造が活性化する傾向が認められた。全体的としては、倭王権の中心地である畿内から、地理的もしくは政治的に隔たった地域においては、後期前半における玉類の流入が少なく、墳墓の築造もあまり活発ではないのに対して、後期後半以降に玉類の流入や副葬が活性化し、墳墓の築造が増大する。後期後半に製作もしくは流入する種類の玉類に関しては、流通システムに倭王権が関与していないとみられる点とも対応する。ただし、畿内から離れた地域においても、東京都府中熊野神社古墳のように、終末期後半以降に降る首長墓においては玉類の副葬が認められないことがあり、従来とは異なる背景で造営された古墳が含まれていることも判明した。

大賀克彦 2020 「磯崎東古墳群出土の玉類」『ひたちなか埋文だより』第 52 号、p 14-18

大賀克彦 2021 「唐堀遺跡 1 号古墳出土ガラス小玉の鉛同位体比」『唐堀遺跡 (1)』(『公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書』第 672 集) p 188-190

大賀克彦・田村朋美 2019 「條ウル神古墳出土のガラス玉類」『條ウル神古墳』(『御所市文化財調査報告書』第 56 集) p 126-137

大賀克彦・田村朋美・池田征弘 2021 「兵庫県出土鉛製耳環の鉛同位体比とその考古学的評価」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第 14 号、p 101-108

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大賀克彦	4. 巻 11
2. 論文標題 鉛同位体比による三角縁神獣鏡製作地の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 古代学	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 大賀克彦	4. 巻 52
2. 論文標題 磯崎東古墳群出土の玉類	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ひたちなか埋文だより	6. 最初と最後の頁 14-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大賀克彦	4. 巻 17
2. 論文標題 大英博物館所蔵 ゴーランド・コレクションの玉類に関する再検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都橘大学大学院研究論集	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大賀克彦	4. 巻 174
2. 論文標題 鉛同位体比からみた三角縁神獣鏡の生産地	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 埋蔵文化財ニュース	6. 最初と最後の頁 38-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大賀克彦
2. 発表標題 鉛同位体比からみた三角縁神獸鏡の生産地
3. 学会等名 保存科学研究集会2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田村朋美・大賀克彦・谷澤亜里
2. 発表標題 対馬出土ガラス玉類の考古科学的検討
3. 学会等名 日本文化財科学会第35回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大賀克彦
2. 発表標題 手工業生産の展開と古墳の築造
3. 学会等名 第24回東北・関東前方後円墳研究会大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田村 朋美 (Tamura Tomomi) (10570129)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員 (84604)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	谷澤 亜里 (Tanizawa Ari) (50749471)	九州大学・総合研究博物館・助教 (17102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関